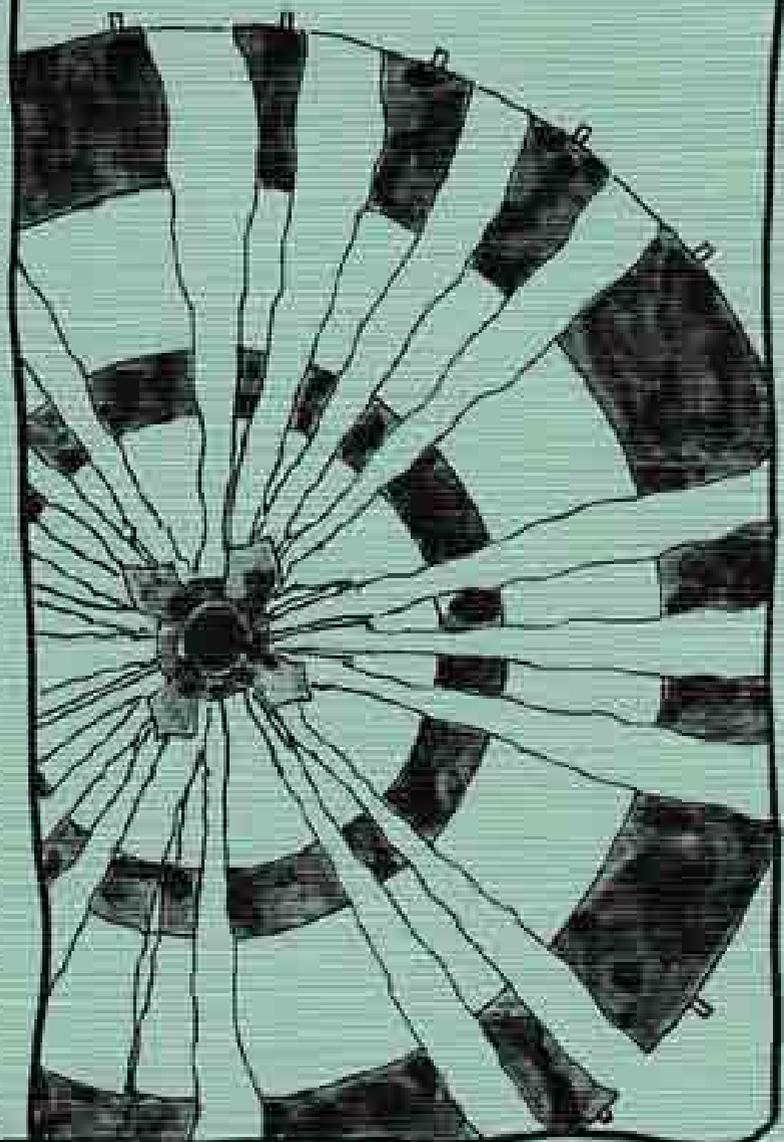


やぶれ傘



一一二号

一九三〇年二月

おのづから醤油を弾く寒卵 根橋宏次
 山羊の名はツヨシとモモコ日脚伸ぶ 大島英昭
 縞々のトートバッグで毛糸帽 青谷小枝
 綿虫と同じ日向に電車待つ きくちきみえ
 白い日がいま冬雲に入るところ 藤井美晴
 餅花のひとつに触れてみな揺らす 廣瀬雅男
 乾門出れば石路咲くお濠端 瀬島酒望
 空くを待つ立ち食ひ蕎麦屋雪催 壯久保 勲
 霜柱何が何でも踏んでみる 安藤久美子
 白菜の尻を落して呉れにけり 白石正躬
 数へ日の岩に据わりし石祠 渡邊孝彦
 庭隅へ日のうつりゆく寒牡丹 秋山信行
 絵に描いたやうな雲浮く春隣 小山よる
 朝刊は休みなりけり葛湯飲む 天野美登里
 短日の厨の換気扇磨く 有賀昌子

抄集 句選 傘紀 大崎 やぶれ傘

初笑ひ口にスイスのチョコレート 松村光典
 冬の月一の鳥居の貫ひかる 萩原溪人
 賀状書く学友二人星となり 橋本美代
 引きずられ引きずられ行く千歳船 広瀬 濟
 骨壺を納めし寺の柿たわわ 増田裕司
 あと一段もう一段と毛糸編む 山本久枝
 当たり矢の音はね返る弓始め 石原健二
 琴の音の流るる店に福袋 稲田延子
 セーターを先づかぶる派と腕から派 岩藤礼子
 寒に入る居間に昔の聴診器 木村瑞枝
 電灯の紐カチと引く冬の夜 倉澤節子
 論客を迎へちり鍋煮立ちをり 小巻若菜
 駒台に歩兵一枚山眠る 竹内文夫
 銀屏風に父の落書き残りをり 柴崎和男
 手水舎の柄杓まつさら淑氣立つ 貫井照子

茶の花のほつほつ咲けり狭山台
海を背に磨崖仏座す石露の花
寅さんの像に集合冬ぬくし
店先で湯たんぽを売る巢鴨かな
槌音の響く師走の現場かな
室外機フル回転の去年今年
落葉踏み文人の墓探しけり

野口希代志

山門の乳鉾の跡や冬に入る
冬の月一の鳥居の貫ひかる
冬霽の揺するがごとき鳥の声
凧は茶色となりて利根川渡る
三尺をこゆる人參引く農夫
柿の蒂のこる裸木すずめ鳴く
円墳に盗掘の跡初音きく

萩原溪人

清掃の終はる公園石叩き
終ひ湯の柚子を引き寄せ引き離し
父母の忌に集ふはらから木の葉髪
掘こたつ組みて吾の席吾の机
子供らはピアノの前にクリスマス
ポインセチア子等戻る日の玄關に
春着の子親の仕草を真似てゐる

萩原久代

参道に今を盛りの櫛落葉
寒風に乾燥肌の痒み増す
ポチ袋と手帳を買うて十二月
賀状書く学友二人星となり
一年の足跡見ゆる古暦
曾孫二人生まれると聞く年の暮
元朝の菩提寺僧のおもてなし

橋本美代

濱野新

冬晴れの乾の空に朝の月
 暦見て忌み日を避けて松飾る
 住所録に故人が増える年の暮
 賀状出す相手減り行く歳となり
 背を丸めバス待つ人の息白し
 寒見舞喪中の友に電話する
 牛乳を暖めて飲む霰の日

広瀬 済

蠅螂を箒に乗せて草むらへ
 引きずられ引きずられ行く千歳飴
 白菜の重さに古いを実感す
 乳母車のなかに老犬冬ざるる
 手袋を外し握手し別れけり
 煮凝りの箸を惑はす朝餉かな
 鍋料理無言でつつく夕餉かな

本郷美代子

冬空にヒコキ雲とヘリコプター
 杖を突く夫の姿や冬の雲
 冬温し下校の子らの声高く
 冬日浴びひねもす猫は窓辺にて
 吹き溜りの中に真赤な落葉かな
 初鏡出勤前の身だしなみ
 足らぬまま残り菜で炊く七日粥

本田 武

石路の花リゾートホテルひとつ消ゆ
 行き行きて過疎集落や山眠る
 カーテンを閉ざれば冬日さつと消ゆ
 旧友とすき焼きつつく外は雨
 冬鷗ベイクォーターに乗船場
 初空や扁額正す僧の脛
 初夢より覚めたとたんに妻の愚痴

骨壺を納めし寺の柿たわわ
ビル風に乗つて飛び交ふ冬雀
来客を鍋で迎へる十二月
初詣厄年のなき歳となり
醍醐寺の森は荒れ果て北風
冬雲があをき空ゆく関ヶ原
寒き夜の妻と迷ひし京小路

増田裕司

松本善一

色形まちまちな家の紋や柿道の駅
白壁の蔵に家紋のや柿の村
筋肉の鎧タトゥーのラガー吠ゆ
冬の薔薇女工哀史の寮の庭
歳の市お化け役らも小屋掛けす
年の瀬やスマホ除け除け歩きけり
他県からトラックのくる歳の市

箕田健夫

冬の土手走る男の子の足早し
熱燗を飲み俳句などひねり出す
枯櫂空いつぱいに枝ひろげ
公園で兎を抱いて日向ぼこ
荒川の土手に腰掛け日向ぼこ
初富士に暮れゆく雲のかかりけり
賀状来ぬ友の身上案じけり

武藤節子

雪吊をしてより松の佇まひ
C T に映らぬ痛み冬ざる
様々にさまざまを捨て十二月
寒禽のひと声高き雑木山
沈む陽のなんと大きく十二月
それぞれの影少し殖やして日脚伸ぶ
もその影少し殖やして日脚伸ぶ

冬夕焼け 凧の川面に映りけり
佇み 思はず 数ふ 冬桜
詰所では 豚汁の出る 夜警かな
日の当る 土手に ごろ寝や 冬の草
富士山は 影絵のごとし 日脚伸ぶ
大寒や 釣れたる 鮓を 塩焼に
春近し 喜寿の祝ひの 赤き シャツ

村田 武

客室の一輪挿しに 冬の薔薇
いつもより 近くに 見えて 山眠る
迷ひ つつ や つぱり 五年日記 買ふ
横着し 窓越しに 見る 初明り
初詣 迷子 注意の 声 流る
初春の 千駄ヶ谷 富士 登り けり
元日に 聴く ニューイヤークンサー ト

森美 佐子

鉄骨を 組む 音 四方に 十二月
公園の 木の葉 時雨を 歩き けり
あと 一段も う一段と 毛糸 編む
シーソーの 片方は 地に 夕時雨
寄せ鍋で 不意の 客人も て なして
お隣りは 猫に 膝かし 日向ぼこ
梅ふふむ 五百羅漢を ひと回り

山本 久枝

湯本 正友

庭手入れ 枯瞠螂と 目の合うて
コスモスの 花の 微かに 揺る 道
銀杏散る まさを の空を ジェット 機雲
ビル壁を まるごと 染めて 冬夕焼
行く先を 競ふ かに 降る 枯葉かな
冬の朝 夜具を 手繰り ても うひと寝
鐘の音を 聴き つつ 寝入る 除夜の床

湯本実

遠ざかるサイレンの音神の留守
短日の駅前ライプ客疎ら
数へ日や笑顔の孫が夢に出て
アメ横の喧騒をゆく冬帽子
小料理屋の二階に灯り除夜の鐘
旅なれば共同風呂で除夜の鐘
石垣は野面積みとか寒すみれ

吉田幸恵

岸壁の錆びし錨に雪はりつき
生牡蠣をむきてつるりと舌の上
昼すぎの日差し干し大根は揺れ
萩茶わん両手につつま冬の月
年の瀬や手をつなぎ合ふ夫の居て
初昔病のあとの手をさすり
祝ひ箸それぞれの名の席に着き

浅嶋肇

干し物の横に並んで吊るし柿
朴落葉思はず朴の樹を見上ぐ
時雨るるや東京駅の赤煉瓦
拳骨で古紙破る障子貼り
去年の風邪持ち越して来てしまひけり
門灯に雨粒光る寒の入り
七種粥食うて出かける句会かな

安齋正蔵

熱爛や次第に激す恨み節
歩きつつはてなはてなと懐手
厚着して隣りの家を訪ねけり
年賀はがきを輪ゴムで束ねポストへと
初詣近くで遠き石畳
寝正月天井の染み見つけたり
左義長や裸参りの鈴の音